第３回　これからの学校づくり検討委員会_議事録概要

日　時	令和４年４月２７日（水）19:00～20:30
場　所	翔陽中学校　３階特別活動室
出　席	別紙出席者名簿のとおり 市教委：教育長、教育部長、教育部次長、指導参事、椎名指導主事、棟方指導主事、山口学校教育課長、松尾学務係長、山本教職員係長、船橋教育総務課長補佐、土橋教育総務係長、林教育総務課主任、菊地教育総務課主事、松浦教育総務課主事
内　容	配布資料：委員会次第 これからの学校づくり第３回検討委員会　時間進行の目安、班分け資料 第３回検討委員会資料 次第 ○　新教育長挨拶 ○　意見交換（ワークショップ） ○　その他 **○　意見交換（ワークショップ）** **テーマ①　「自分にはよいところがある」と回答する子どもがすくない　【A→B→C 班の順で発表】** ＜市教委よりスクリーンへ資料を投影し説明＞ 【各班発表】 Ａ班 〇私たちＡ班は子どもの視点から級友・学級、そして先生、最後に家庭地域の視点から原因と改善策を考えました。 まず、級友・学級の中では、自己肯定感が上がらない理由として、授業や行事などの活躍する場面が不足し、級友から認めてもらえる環境にいないのではないかという意見が出ました。改善策としては、多様性が認められる環境づくりや良いところを認めて伝え合うことが大切だという意見が出ました。 先生との関わりについては、近年の先生は同じ事を同じように指導する場面が多い傾向にあり、学級の生徒数が多くなってきていることで、先生と距離ができて話す機会が日常的に少なくなり、子どもが認めてもらえる場面が不足し、簡単に解決できることが難しくなってきているのではないかという意見が出ました。改善策としては、先生にゆとりをもたせるために働き方改革を進めて、ゆっくり子どもと向き合う時間をつくることや子どもを大人扱いすること、それから、何か取り組みを始める子どもたちに対して、先生が先回りし失敗する前に止めてしまう場面が多い傾向にあるので、成すことによって失敗から学び活かすことも大事であると考えました。また、先生方が生徒を呼ぶ時も平等に「さん」「くん」を付けるようにするなどロボットのようになっているような印象を受けます。子どもも大人も周りから必要とされていると実感し充実した生活を送るために、子どもが頑張りを褒めて欲しいと思うところを見極めて先生が褒めてあげることや活躍できる場面、必要とされる場面を設定することが大事なのではないかという意見が出ました。 家庭地域については、家庭でのコミュニケーションを取る時間が不足し子どもと向き合う時間が不足していることや地域とのつながりも少なくなり、将来に夢を持てないことや子どもたちへの関心や優しさなどを上手に伝えられていないなどの課題ができ、子どもが私たち大人を信用できていないのではないかという意見が出ました。改善策としては、地域とのつながりを増やし共通認識を持ち取り組むことや、保護者の方から時間が無い中でも会話できるように子どもに話すきっかけとして、学校でどのような勉強をしているのか、将来の職業について聞くことなど感心

を示し、家庭の中で社会性を示してあげることが大事だという意見が出ました。A 班からは以上です。

B 班

〇B 班でも非常に活発なご意見を頂きました。いろいろと出ましたが、今の子どもたちは他人と比べてしまったりして、自信が無い、全体的におとなしい子が多いよねというようなお話し。そこに対して、今の子どもたちにどういうことがあるのかな。周りの取り巻く環境が、おうちの人が、お父さん、お母さんが共働きで家庭での時間が取れない。ただ、家での時間がぎゅーっと縮まってる中で、その一方でスマホを使って SNS を見たり、ユーチューブを見たり家族とのコミュニケーションの時間に使われる時間が本当に短くなっているのではないかという意見を頂きました。

ですので、まずそこの現状にある子どもたちに、どういった風に関わり方をしてあげた方が良いのかというお話しが沢山出たように思います。自信が無いという子どもたち、褒められているっていう経験がしっかりしているのかな、家での時間短い中できちんと褒めてあげたいとか、学校で良いところをどんどん見つけてあげる事も、凄く大切なのではないだろうか。物を買い与えるのではなく、子どもたちが褒められただとか、あるいは家族でいろんなイベントがあって楽しかったという物より思い出だとか、そういったお話しも出てきたところです。そういった子どもに対する関わり方といったお話しが中心に多く出てきました。

あと、おもしろかったのが、その子どもたちを支えていく周りの環境といったお話しが出てきました。昔は道草することあったけれども、今の子どもたちってすることあるんだろうか、なんとなくどこからどこまでが家庭の責任で、どこからどこまでが学校の責任、何かあったら学校何やっているんですか、地域の人ちゃんと見ててくれなかったんですか、そういったところがギチギチになってしまって、いい意味で許されないよねという環境のお話しですとか。昔は子どもの社会がしっかり形成されていたから、どんなトラブルでも子どもたち中心で解決できたのだけれど、今はない。だったら、そういった子どもの居場所づくりというのは、ある程度地域や学校がある程度携わりながらつくってあげることはできないのかなという、そういった環境づくりと子どもたちの関わり合い、その中から少しでも良い方向に向かえないだろうかというお話しがでました。少し雑駁ですが、B グループの発表でした。

C 班

〇まず、視点としては家庭というキーワードでお話しをしてみました。親の子離れが遅い家庭が多い。親が依存。家庭の教育という部分では、他の子どもとの比較、親のおしつけ、減点法によって子どもを見てしまう、悪いところばかり見てしまうところはないだろうかというお話しを頂きました。

このような家庭の環境の中で、親と子どものコミュニケーションが不足している中で、中々自尊感情、自分には良いところがあるという子どもは、育っていかないだろうと話しました。その中で、なぜそうなっていくかと考えたときに保護者の余裕が無いというのが、現実ではないだろうか、子どもを見てあげたい、子どもも親と話をしたい。でも、そんな時間がなかなか取れない現実があるのかなというところでした。そのような中では、子どもの自尊感情も育たず、SNS、それから同調しないといじめられてしまうような環境にあるのかなという話があがっていきました。そこで、どうしていくべきかとういところなのですが、まずは家庭で会話をする時間や褒めてあげる機会を多くつくっていきたい。自尊感情を高めるような機会、その中で学校の存在とういうのもキーワードとして出てきました。

例えば、〇〇委員よりお話しを頂いた、帯広市では小学生が自転車を降りて横断歩道を渡って、ぺこりと礼をしているが、室蘭では中々そのような子どもは見ないよねというお話しを頂きました。自分も車を運転していて、そういえば中々少ないなと聞いていて、思ったところです。その話はどこに繋がっていくか、帯広市では町としてマナーを伝えていく事を重視しているというお話しを頂きました。家庭が良ければ自尊感情が育つのか、それだけでなくて町として数字に表れ

ない子どもの良さをどれだけ育てていくか、その時に家庭と学校も同じ方向を向いていく事が、大事なのかな。数字に表れないということだけではないですが、全国平均と室蘭を比べてどのように改善していくか、どうして室蘭は低いのかという対策これだけなら一般論で終わるところです。外国では自分の自己主張が出来る子どもたちが多いが、なかなか日本人はできない。なぜか。自信を持って発言・行動できる子どもたちをどう育てていくかという時に、地域から認められる機会、学校の先生からも認められる機会を、多くつくっていくべきではないかというところで、Cグループでは家庭と自尊感情というところから、どのような町をつくっていくかという時に、子どもたちが自分で自信を持てる指導を学校、家庭、地域で同じベクトルを方向に向かっていく事が大切なのかなというお話しをいただきました、Aグループ、Bグループとも同じような話がありましたので、そこは割愛させていただきます。以上です。

<u>テーマ②　ふるさと室蘭に愛着をもつ子どもが少ない　【A→B→C班の順で発表】</u>

＜市教委よりスクリーンへ資料を投影し説明＞

【各班発表】

Ａ班

〇A班はまず、話に入る前にこのテーマがショッキングですよねと。全国的にみれば人口に関係なく町でも村でも、誇りを持っている愛着あるところは高いのに、室蘭はなぜこんなに低いのだろうというところから始まりまして、要は室蘭の良さに気づいてないのではないだろうかと、本で見たり、「私たちの室蘭」で見たりしても、実際、体験・経験していない。誇りを思えるところに気づいて無いのではないかということでした。

小中９年間で、室蘭のふるさとの歴史だとか、物づくり調べたり体験したりすることで、愛着や誇りを育むことができる。他の町に良いところを伝えることが大事で、それが将来室蘭で暮らすイメージにも繋がるんじゃないかと、ひとつ意見が出ました。

ふたつめは、室蘭について子どもの思い出、近所の友達や大人との交流が減っていると、それが如実に表れているなと、町内会の加入率もどんどん減っていると、昭和は90%だったのが、今では60%になっていると、地域の行事に参加しても、その時は楽しかったとなっても、その次に繋がっていっていない。それを改善するために、地域の人との繋がり・ボランティアの参加によって、地域の絆の一員としての自覚を持つことで、ふるさとへの愛着や誇りになるんじゃないかだとか、ふるさとの良さを知り、地域の自覚が生まれることが先ほどの自己有用感の向上にも繋がっていくのではないだろうか。そして、何かしら役割をつくる。具体的にいいますと、人との繋がりです。親でも地域の人、友達、仲間でも自分たちの考えたことがそこに残るというか、自分の学校があるというかそれも大事ではないかということでした。以上です。

Ｂ班

〇親の世代、それから子どもの世代というお話しがまず最初に出てまいりました。そもそも子どもに対して伝えていくときに、親が地域のことをよく知らないのではないか、良さというものを知らないのではないかというお話しですとか、そもそも工業都市なんてそんなものではないか、元々自慢できるところなんて多くないんじゃないでしょうかというお話しなんかも出たところです。そういったことが、子どもが室蘭の良さを知るチャンスが少なくなってきている原因ではないかというあたりのお話しを頂きました。

なので、それに対して子どもたちに、まず学校などで、室蘭の良さをしっかり教えて欲しいなというような意見、室蘭の誇りがそもそも魅力が町としてなくなってきているのならば、例えば、ロボットサッカーだとか、室蘭の誇りになるようなものをつくっていく、助長していくということが大事なんじゃないだろうかという話が出ておりました。最終的に先ほどのお話しは、家庭で関わることが多かったのですが、こちらのお話しは、むしろ学校だとか市、地域、行政で関わっ

	ていけること、解決できることが多いかなというお話しが多かったように思います。以上Ｂ班でした。 Ｃ班 〇ふるさとへの愛着ということで、話を進めようと思ったのですが、最初のスタートについてみて、町の魅力がないというお話しから、どんどん進んでいきました。ここという押しがない、楽しい行事が少ない、子どもたち・若者が遊べる場が少ない。何度も行きたいと思う施設がない。図書館になぜスタバを入れなかったのか。そのようなマイナスの意見が沢山出てきました。そんな状況では守り続けるものは少ないのではないか。室蘭を好きなになってくれる子どもたちが少ないのではないだろうか。活躍の場が少ないのではないだろか、というところから、考えてみたのですけれども、じゃあそれをどう改善していくか、というときに、実はもっといいところがあるのに、それを伝えられていないんじゃないかという話がありました。 　室蘭のいいところは、大きい病院が多い。雪かきも少なくて済む。実は、千歳にも近い。海、山、平地、景観にも富んでいる。マイボートも持ちやすい。実は、便利なところも沢山ある。それを、子どもたちに魅力を伝え切れていないのではないだろかというお話しがありました。親も室蘭の良さをわかっていない部分もあるのかなと、それを子どもたちにどう伝えていくかが、大切なのかなというところで一段落話がまとまりました。それとは別に、もっと大きな視点で考えたときに、室蘭ってどんな町ですかと聞かれたときに、室蘭イコール、サッカーというのがあったのですけれども、今はそれが薄くなってきている。一通りいろんな施設がある、いろんな事もやってくれているのですが、室蘭イコールというのが、どれだけあるのかと町を挙げて徹底するものがあってもいいのではないか。 　逆の視点から考えると、特別なことがなくても、人の温かみが感じられるそんな町をつくっていけると子どもたちは、自分の町を離れても良さを思い出せるのではないかなと、人の温かさを感じることができるというのは、先ほどの自己有用感、地域との繋がりという部分にも繋がっていくのではと考えております。町の魅力を伝えていくことには、まず子どもたちにしっかり伝えていくという事が大切なのかなというところで、Ｃ班僕の進行が悪く、うまくまとまらなかったのですけれども、このような話題があったので紹介させていただきました。以上です。 ＜検討委員会終了＞